

## 第6回

書道監修・執筆 川合広太郎

# 手書きだから伝わること ~生活の中の書~

### 今回学ぶこと

書は作品として発表するものだけではない。実際には日常生活のさまざまな場面に手書きの書が生きている。今回はその中から、冠婚葬祭や展覧会の受付などで用いられる芳名帳と、ハガキの宛名書きにチャレンジし、毛筆、硬筆それぞれの書の楽しみ方を知ろう。

学習前チェック! 用語の意味を確認しておこう

毛筆／硬筆／冠婚葬祭／展覧会／暑中見舞い／宛名／書式

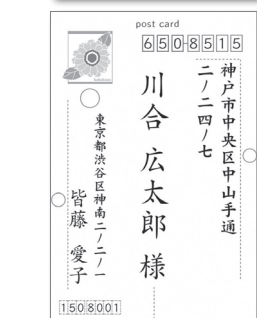
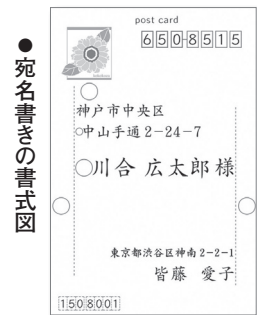
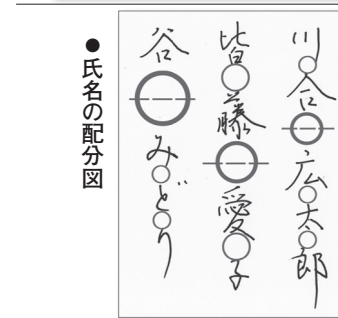
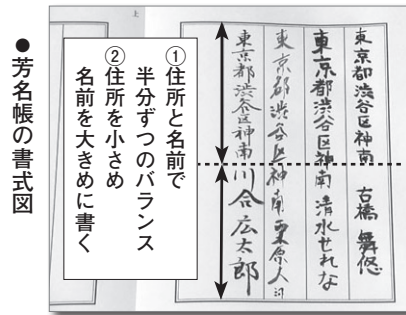
## 芳名帳 (小筆で書く)

芳名帳に書くときの配分の目安は、上半分に住所を、少し空けて、下半分に自分の氏名を書く。

- 住所……氏名よりも細く小さめに。横幅を広めにして文字をつめて書こう。
- 氏名……住所よりも大きめに。堂々と書こう。

芳名帳は立った姿勢のまま書く。慣れない姿勢だが安定した線が引けるよう、日ごろから小筆の扱いに慣れておくとよい。小筆はなるべく立てて運筆しよう。

### 今回のお手本



### 今回の課題

- ① 場面設定をして、芳名帳に住所と氏名を小筆で書いてみよう!
- ② 暑中見舞いの宛名書きを、書式にのっとって硬筆で書いてみよう!

## ハガキの宛名書き（硬筆で書く）

宛名書きは郵便物の顔。書式にのっとって、ゆっくりとていねいに書く。

筆記具は黒かブルーブラックのペン、または万年筆を使おう。相手の住所、氏名、自分の住所、氏名、それぞれにふさわしい位置や大きさがある。文字の大きさや配置をしっかりと意識しながら書こう。

まず最初に、ハガキの中心になる相手の宛名を、相手の住所よりもやや下からと意識をして書き始めるのもよいだろう。差出人の住所氏名はスペースも狭い。控えめに小さく書こう。

## 筆記具の歴史

中国や日本では古くから「毛筆」が使われてきた。一方、世界に目を向けると、硬いペン先を使う「硬筆」が中心で、長い歴史がある。

- 6000年前メソポタミア ……植物の葦の茎で粘土板に書いていた。
- 古代エジプト ……インクが登場、パピルス紙に書いていた。
- 7世紀ヨーロッパ ……羽ペンが主流に。
- 19世紀アメリカ ……今の万年筆の形に。

### 達人からひとこと！

書は、何も作品として発表するものだけとは限らない。日ごろの生活の中を見回してみれば、看板や新聞雑誌のタイトル、また冠婚葬祭や季節の挨拶状など、手書きが必要とされる場面が意外にも多くある。これらも広い意味では立派な書だ。まずは生活に身近なところから、書に挑戦しよう。一度経験をしてみれば、その技法、書式、道具、歴史……と、疑問や興味は広がってゆく。下手でもいい。まず恥ずかしがらずに手書きを楽しむ気持ちが大切だ。



達人

川合広太郎